

原作：佐藤永志／オーバーアクション  
白岩義男／オダギリジョー  
田村聰／蒼井優  
代島和之／松田翔太

島田光／松澤匠  
勝間田憲一／鈴木常吉  
尾形洋子／優香  
2016年・日本映画・112分  
配給／東京テアトル

はじめに  
はすばらしい時  
間

受賞するとともに、日本映画ベスト・テン第1位に輝いた。私は『その輝く』の評論を書く中で、前作の『海炭市叙景』と山下敦弘監督による本藤春吉の小説の「3部作」として映画化が宮であることを知ったが、なぜ

に、少なくとも私には無  
たの？

繁に取り上げ  
（？）まなざ

間佐藤泰志』を読

人間佐藤泰志と  
『そこのみにて』  
同じ1949年生

1973年には差したらしい。和司法修習を経て、

の一本道の人  
節」が過ぎた  
ことが、この

佐藤泰志は5度も芥川賞にノミネートされ、1990年に41歳で自殺してしまった。しかし、地元函館を舞台とした小説『死の島』は、今でも人気がある。

して評価が高いいら  
上言えないが、『  
に訪ねたことのあ

＜舞台は職業訓練校！そんなのが今ドキあるの  
本作冒頭、喫煙室らしき部屋で同じ作業着と

を吸いながら雑談している風景が映し出されるが、男同士のボソボソした会話は聞き取りにくい。続いて、彼らが教官（？）の厳しい「指導」の下で大工仕事に励んでいる風景やグラウンドに出てピッティングの練習をしている風景が映し出されるが、ここは一体どこ？ここで登場する俳優が高倉健なら、それは刑務所で決まり！しかし、十数人の男たちが、教官の厳しい指導付きながらも割と自由に動いている姿を見ると、ここが刑務所でないことは明らかだ。

その後、ここは「職業訓練校」だということが明らかになるが、職安（職業安定所）がハローワークに変わったうえ、「一億総活躍社会」が標榜され、「働き方改革」が進められている昨今、「職業訓練校」なんてものが今もあるの？それはともかく、本作が函館の職業訓練校を舞台にしていることからも、これは佐藤泰志自身が1981年、30歳の時に一時函館に戻り、職業訓練校に通って大工の技術を学んだ時の体験を題材にしたものだということがわかる。しかし、2016年の今となっては、職業訓練校そのものが、既に歴史的な遺物になっているのでは・・・？

何はともあれ、本作導入部では、この職業訓練校の実態に注目！

### ＜この2人の男を中心に物語が展開＞

本作の主人公は妻子と別れ、一人孤独なアパート住まいをしている40代の男、白岩義男（オダギリジョー）。当然彼が佐藤泰志本人を反映させた人物だが、小説と映画とでは、この主人公の年齢等は大きく作りかえられているらしい。白岩は一癖も二癖もある職業訓練校の同僚たちと表面上はうまく付き合っているようだが、なかなか「本音」を見せないのでその「本性」はわかりにくい。

他方、白岩に対して「今夜飲みに行きましょうよ」と誘う、カッコいい若者・代島和之（松田翔太）の方は、白岩を誘って行ったキャバクラ店で「自分がこの店の経営をやるので、副店長みたいな形で一緒にやりませんか」とあっけらかんと誘ってくるので、ビックリ！オフィス機器や事務機のレンタルの営業をしていたと自己紹介し、現在は職業訓練校で大工（建築）の実習を受けている代島のような男が、いきなりキャバクラ店の経営なんてホントにできるの？白岩がそう考え、返事を濁したのも当然だ。

本作では、職業訓練校に通う白岩と代島を中心に物語が展開していくので、この2人の男に注目！

＜「はみ出し者の群像劇」にみる男たちの姿は？＞

読売新聞の映画評では、田中誠氏が本作について「『はみ出し者』の群像劇」と題して、「山下監督の近作の特色ともいえる、はみ出し者に注がれるまなざしが温かい」と書いていた。なるほどなるほど。本作はたしかに職業訓練校に通う年齢も素性もバラバラな男たちの群像劇だ。そして、「一歩間違えた後の人生とどう折り合いを付けるのか。」それが、訓練生たちすべての共通テーマになっている。もちろん映画ではその答えは出ないし、小説でもそれは出でていないはずだ。

本作はそんなはみ出し者の群像劇の中で、白岩と後述するヒロイン田村聰（蒼井優）との純愛（？）を中心に描いているが、その舞台となっている職業訓練校におけるそれ以外のはみ出し者たちの姿もチラリチラリと描いているので、そこにも注目！その男たちのキャラはここでは詳しく述べないが、①中卒の若者・島田晃（松澤匠）と、いつもいがみ合っている大学中退の若者森由人（満島真之介）、②元ヤクザだが今は意外にも「こちら側」の人間として妻子と共にまともに生きようとしている原浩一郎（北村有起哉）、③一人だけ60代だが、全然若者や中年男たちの

しぶりがとりわけ目立つが、他の男たちはみ出しぶりもそれ相当なものだから、それに注目！

<白岩と聰の出会いは?>

岩井俊二監督の『リリイ・シュシュのすべて』（01年）でデビューした時の蒼井優を私は観ていないが、『花とアリス』（04年）（『シネマーム4』326頁参照）を観た時から私はすっかり蒼井優ファンになった。『フラガール』（06年）（『シネマーム12』52頁参照）と『百万円と苦虫女』（08年）（『シネマーム20』324頁参照）は特に好きで、近々公開予定の『アズミ・ハレコは行方不明』（16年）も大いに期待している。そんな蒼井優が本作では、初登場のシーンからいきなり路上で「ダチョウの愛情表現」だと言いながら、前屈みになり、両手を広げて尻を突き出し、左右に身体を振りながら「ポロッパー」と鳴き真似し、身体を低くしていく演技を見せるからビックリ。このシーンだけで観客はこの女性に興味を持つはずだ。そして、それはたまたまそのダンス（？）を自転車を停めて見ていた白岩も同じだったらしい。

この女性の名前が聰（さとし）という男のような名前だということがわかるのは、白岩が代島に連れられていったキャバクラの中。つまり、聰はそこでキャバクラ嬢として働いていたわけだが、聰は店内でも堂々とその鳥の求愛ダンスをやっていたから、ひょっとしてこれは聰の営業用の隠し芸・・・？一瞬そう思ったが、聰が昼間動物園で働き、鳥の世話をしている中でそんな鳥の姿に憧れていることを知

すると白岩は、次第に彼女の奥深くにひそんでいる本性に近づいていくことに・・・。

＜ヒロインの超異質性と超異質な展開に注目！＞

それはそれで想定内のストーリー展開だが、本作のヒロイン（？）聰が超異質なのは、動物園でのデートを経て、夜遅く聰の部屋（そこは実家の離れらしい）に二人で入り、結ばれた後のシーンだ。二人がはじめて結ばれるまでのシチュエーションはどんな小説や映画でも最大の注目点だが、本作のそれはかなり異質だから、まずはそれに注目！しかし、それ以上に異質なのは、ふと目覚めた後に発生する、白岩が指に付けていた結婚指輪をめぐる2人の言い争い（痴話ゲンカ？）だ。白岩にしてみれば、それは難癖以外の何者でもない言いがかりだが、聰は真剣で、目をつりあげ、挙げ句の果ては近くにあった鉢植えを白岩に向かって投げつけたから、それが窓ガラスに当たってガシャリ！そして、最後のセリフは「帰ってや！」だから、白岩は災難だ。

キャバクラの帰り、「あの女はやれるよ」と言われてついていき、うまくコトに成功したものの、その後さまざまな災難が・・・。そんな話はバブル時代の1980年代のあらゆるキャバクラ店であったが、休日に動物園でデートした帰りにキャ

バ嬢が自宅に誘い込み、自分から裸になっておきながら、コトが終わった後に結婚指輪を見てこんなケンカに・・・。もちろん、本作をそういう俗っぽい見方で鑑賞してはダメだが、表面上のストーリーをわかりやすく解説すればそういうものだ。

しかし、実はこんな異質なシチュエーションと異質な会話とケンカ、そしてその結末の中に、なんとも異質な人間の本性に迫っていくヒントがあるからそれに注目！それを若い名女優蒼井優が体当たりで演じ、名俳優オダギリジョーが身体ごと受けとめているので、本作ではそんなヒロインの超異質性と超異質な展開に注目！

映画化になつたらしい。それをうまくまとめた(?)のはさすが山下敦弘監督の力量だが、聰がこだわるように、白岩はなぜ離婚したのに今なお結婚指輪をしているの?そしてまた、白岩がバツイチになった離婚原因は?そこらあたりが本作は複雑だし、何せ当の本人がまともに説明していないからわかりにくい。

スクリーン上では、別れた妻の父親から送られてきた手紙に「これしきのことでの娘を実家に帰して寄こす君の無責任で冷たい仕打ちには腹も立ち、娘ももうそちらに帰す気はまったくありません」「娘はまだ若く、失敗は失敗として再出発の方法を捜してやりたく思っておりますので今後のことば、一切口出し無用に願います。子供については、一応、君は父親だが、会わせる気はなく、もし異論があるならば、法的に異議を申し立てるよう願います」「今後、いかなる音信も不要で、直接連絡を取るようなことはしないでいただきたい」と書かれているのを黙って一人で読む白岩の姿が映し出される。

アパートの中は殺風景で、自転車で通う職業訓練所からの帰りにコンビニ弁当とビール2缶を買って帰るのが白岩の習慣らしいが、ホントにこんな生活でいいの?団塊世代の人間でも、私のような前向きな人間(?)はそう考えてしまうが、佐藤

<妻との再会シーンにアレレ・・・？さて真相は？>

前述した聰との痴話ゲンカ（？）の中で、少しだけ離婚と子供についての白岩の心境が吐露されるが、それはほんの一部だけだ。本作にはその後白岩の別れた妻・尾形洋子（優香）が登場し、喫茶店の中で親しく語り合った上、「今後も連絡を取り合いましょう」と話しているシーンまで登場するからアレレ・・・。これでは、妻の父親の言い分とは大違いでは・・・？さらに、スクリーン上で見る洋子はいかにも元気そうだから、その姿を見ている限り、前述した父親の手紙とは実態が大きく違っているようだが、さて真相は？

もっとも、今はここまで元気になっている白岩の元妻洋子が、離婚当時は精神錯乱状態にも似たひどい落ち込みようだったとすれば、洋子をそうさせた原因はすべて白岩にあったのかも・・・？しかし、白岩は聰に放った言葉（弁解？）は、「殴ってもないし、家にもちゃんと帰ってたろッ あれ以上なにやればよかったです！俺がどんだけ我慢してたか知ってんのかよ？なんにも知らないくせに言いたい事だけ言ってんな！」というものだから、弁護士の私には白岩の言い分にも妥当性があると考えられる。もちろん、真相は誰にもわからないだろうが、なるほど小説家・佐藤泰志の分析は鋭く、かつ深いものがあると感心！

＜タイトルの意味は？この映画は前向き？＞

2016年5月14日に観た『オマールの壁』（13年）は、イスラエルとパレスチナを隔てる壁を乗り越えて、主人公のオマールが恋をする物語と思っていたが、実はそれ以上の深みがあった。私は『オーバー・フェンス』というタイトルを見て、本作もそれと同じように、白岩がとじこめられた世界から別の世界へ飛び出していく物語だと勝手に想像していた。しかし、本作のクライマックスがソフトボールに設定されていることが見えてくると、そうではないことが少しづつわかつてくる。つまり、オーバー・フェンスとは、計756本のホームランを打って「世界のホームラン王」になった王貞治のホームランのように、文字通り、白岩がソフトボール大会で放ったホームラン（＝オーバー・フェンス）のことなのだ。